

Essay

英国における芸術と高齢者 —概観

デービッド・カトラー | ベアリング財団 代表

はじめに

この論考は、英国で現在行われているアートと高齢者の多様な活動の概要をご紹介します。字数の関係から、多くの興味深く重要な事例を削らざるを得なかったことを最初に申し上げておきたい。より多くの情報は、ベアリング財団¹やエイジ・オブ・クリエイティビティ²のウェブサイト、加えて近年、超党派議員連盟によって文化芸術が人々の健康や幸福度にいかに寄与しているかまとめた報告書「クリエイティブ・ヘルス：健康とウェルビーイングのための芸術」³により多くの情報が掲載されているのでそちらをご参照いただきたい。

私自身も、2015年にブリティッシュ・カウンシルの招聘により、アートと高齢社会をテーマにした交流プログラムのため来日の機会を得て大変多くのことを学んだ。その際のレポートは「リビング・ナショナル・トレジャー」⁴に詳しく記載している。来日を契機に、素晴らしい「さいたまゴールド・シアター」とも出会い、日本と同様に高齢化の課題を抱える韓国や台湾でも英国との交流プログラムが実施されることになった。

その後の人生においてなぜ芸術が重要か

創造的であること、そして文化芸術に参加する権利は、いかなる年齢においても人間にとっての基本であり国連においても認められている。こうした倫理的な理由に加えて、少なくともほかに「健康とウェルビーイング」「ソーシャル・インクルージョン」そして「経済」という3種類の理由が存在する。

創造性が身体や精神、ウェルビーイングに及ぼす効能に関するリサーチが、現在数多く存在し増加し続けているが、ベアリング財団がメンタルヘルス財団に委託したレポートでも「健康とウェルビーイング」に関連して、文化芸術がもたらすポジティブな変化についての記載がある。この件については、「クリエイティブ・ヘルス：健康とウェルビーイングのための芸術」の中でも詳細に述べられており、とりわけ認知症とともに生きる人々にとって

の文化芸術の持つ力が注目されている。ウェルカム・トラストの学際的な取り組み「クリエイティッド・アウト・オブ・マインド」にもつながった。

英国において人々は年齢に応じた集団に属し、異なる世代間が交わらないという傾向が加速している。この状況はいくつかのケアホームでも顕著であり、多くのアート機関が取り組んでおり、とりわけ「マジック・ミー」という団体によって世代間の交流を促進させる活動が行われている。

最後に経済的なベネフィットだが、これは医療費の削減に加えて、文化芸術へのシニアの観客層を新たに開拓するという点もあげられる。アーツカウンシル・イングランドの調査によると、70歳以上になると人々の芸術への関わりは急激に減少するという。

政策

芸術及び高齢者についての公式の政策といったものは、英国には存在しない。第一には、自治権によって、高齢者や芸術に関する政策、財源、法令、公共サービスはすべて、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドに委ねられており、したがって政策もそれぞれ異なるという訳だ。しかし、一般論からしても、公的介護支援といった高齢者に関する政策のなかでは、芸術の価値や関連性について何ら触れられることがないのが現状である。

ここで、政策よりもはるかに重要になるのが、4つのアーツカウンシルである。英国において芸術に投下される公的資金の規模を考えると、助成配分と優先順位を定める上で、政府による直接的な管理からは一定の距離（アームズ・レングス）を置くこれらの機関の役割は、極めて重要である。一世代前までは、いずれのアーツカウンシルも子ども・若者に重点を置き、高齢者についてはほとんど言及してこなかった。しかし社会の高齢化によるさまざまな影響や、国民の芸術参加が70歳を境に急減するという事実は、この10年間で、すべてのアーツカウンシルが認めるところとなった。それぞれ独自に、高齢者に特化した新規助成を導入したり（アーツカウンシル・イングランド「セレブレイティング・エイジ・ファンド」、アーツカウンシル・北アイルランド「アーツ・アンド・オールダー・ピープル・ファンド」）、既存の主だった助成に高齢者を加えて強化するケース（クリエイティブ・スコットランドの平等に関する施策）、野心的なプロジェクトに集中的に助成する（アーツカウンシル・ウェールズ「介護施設におけるアーティスト・イン・レジデンス」事業）ほか、これらを組み合わせて支援をおこなっている。

英国において介護や福祉に関する公的な機関の間で、

芸術の重要性に対する認識が高まってきている。たとえば、イングランドにおけるケア・クオリティ・コミッションは、介護施設が優れているどうかを検証する指標の一つとして「創造性」を掲げている。スコットランドのケア・インスペクトレートでは、すべての介護施設に対してリソースパックを配布している。

自治体の責任やリソースは英国の地域ごとに様々だが、我々の最近のレポートでは、高齢者にとって芸術の重要性を提唱していく上で、自治体が理想的な立場にあるのではないかと議論している。英国での優れた事例としてはマンチェスターが挙げられ、ここ10年以上にわたって世界有数のアート機関によってエイジフレンドリーな活動が地域住民に対して提供されてきた。自治体は介護施設やデイケアサービスも提供している。ロンドンのルイシャム地区では、「オールバニー劇場」と「エンテレキー・アーツ」が高齢者に向けてランチタイムに参加型の芸術活動を提供しており先進的な連携といえる。

歴史

高齢となりなお活躍する芸術家は、いつの時代にも存在している。今年80歳をむかえたデイヴィッド・ホックニーの回顧展は、英国の現代美術史上で、最も成功した展覧会の一つに数えられるし、キャリル・チャーチルは、やはり80歳で、今なお演劇に革新をもたらし続けている。

また、退職し家族を支える必要がなくなった後、晩年になってはじめて芸術に足を踏み入れる者もいれば、かつての経験者がアマチュア愛好家として芸術に戻ることもある。フランソワ・マタラツの著書『冬の炎 (Winter Fires)』はこのことを見事に考察している。

しかし英国において、芸術団体が高齢者との活動に関心を示し始めたのは、近年になってのことである。おそらく1960年代～70年代まで遡るが、いくつかの芸術団体、なかでも小規模の団体が、地域社会への関与の在り方について再考した結果、コミュニティ・アート、参加型アートなどの名称で、さまざまな実践が試みられることとなった。労働者階級、とりわけ黒人やエスニック・マイノリティのコミュニティに働きかけ、そのコミュニティに適した活動をおこなおうとする試みである。こうした芸術団体のなかでも、さらに少数が、高齢者や、例えば介護施設に暮らす、より弱い立場にある高齢者を巻き込んだ活動を志した。この分野の活動は、現在では一般に「クリエイティブ・エイジング」または「アーツ・アンド・オールダー・ピープル」と呼ばれており、着実に成長を続け、特にこの10年程で大きく発展を遂げた。

芸術分野別の事例

— 演劇

英国では今、プロのアーティストが指導する高齢者劇団が花盛りで、英国全土で少なくとも40団体が活動している。これらは2016年にケイト・オーガンがまとめた『演劇の新しいかたち (A New Form of Theatre)』で概説されている。北アイルランドの「ビッグ・テリー劇団」による「スプリング・チキンズ」のように、既存の劇団の活動の一部として高齢者劇団が形成されているケースがまずあるが、こうした劇団が一同に会する初めての全国的なシンポジウムが、2016年にウェスト・ヨークシャー・プレイハウスでおこなわれた。同劇場は「認知症フレンドリー」な公演を率先して開発してきたパイオニアで、詳しいガイドも出版されている。2018年にはこの活動のフォローアップとして、「演劇と認知症」をテーマにフェスティバルが予定されている。そのほか英国での最新の動きとしては、マンチェスターの「ロイヤル・エクステンジ・シアター」によってシアター・カンパニーのネットワークが作られようとしている。

高齢者の生活をとりまく問題を扱う演劇作品も増えつつある。例えばウェールズの劇団「リ・リブ」の『私の居場所 (Belonging / Pethryn)』は、認知症のもたらす影響に目を向けたものである。エジンバラのフェスティバル・シアターでは、劇場全体を認知症フレンドリーへと転換するプログラムを推し進めている。また、「スペアタイヤ」や「ラダー・トゥ・ザ・ムーン」など多くの劇団が、介護施設で入所者の演劇体験を支援するプログラムをおこなっている。ケルンの「ウェルクシュタット劇場」の主導のもと、ドイツでも高齢者による演劇活動は大変盛んである。

— 文学

スコットランド・ポエトリー・ライブラリーとスコットランド・ストーリーテリング・センターが実施した、「リビング・ボイス (生きた声)」という介護施設での活動プログラムがまずあげられる。「cARTrefu (ウェールズ語で「住む」)」プロジェクトや、イングランドのヘレフォードにあるコートヤード芸術センターなどでは、詩人たちによる介護施設でのレジデンス・プログラムが実施されている。リバプールに拠点を置く「リーダー・オーガニゼーション」は、声に出して読むことを介護に採り入れる活動に積極的だ。米国で開発された「タイムスリップ」は、認知症の人々に詩や小説の創作を促す手法として広く受け入れられており、「イコール・アーツ」をはじめ多くの芸術団体が採用している。しかし英国には、オランダで開催されている介護施設における文学の祭典「グルート・レター・

フェスティバル]ほどの規模を誇る活動は見当たらない。

— 音学

ウィグモア・ホールでは、プロの音楽家が介護施設を訪れておこなう優れたアウトリーチ・プログラム「ミュージック・フォー・ライフ」を、長年にわたり実施している。ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団は、「ストローケストラ(ストロークとオーケストラを組み合わせた造語)」と題した、脳卒中を患った人々のためのリハビリ・メソッドの先駆者である。「タートル・キー・アーツ」はこの10年、認知症患者のためのプログラム「タートル・ソング」をおこなっており、セージ・ゲーツヘッドでは、「シルバー」のための楽器や合唱のさまざまなプログラムが展開されている(ここのシルバー・ウクレレ・オーケストラより愉快的なグループにはめったにお目にかかれない)。シティ・オブ・ロンドン・シンフォニアには長年続く介護施設でのコンサート事業があり、ジュイッシュ・アが運営を担っている。ライブ・ミュージック・ナウは、「ア・クワイア・イン・エブリー・ケア・ホーム(すべての介護施設に合唱団を)」を提唱し、歌が認知症の人々にもたらす恩恵について訴えている。

— ダンス

高齢者劇団と類似のパターンで多くの高齢者のダンス・カンパニーが出現しており、年配のダンサーや振付家がグループを率い、指導をおこなうケースが多く見られる。なかでもサドラーズ・ウェルズ劇場は突出した存在で、同劇場は世界的にも知られる高齢者舞踊団「カンパニー・オブ・エルダーズ」を立ち上げるにとどまらず、新たに高齢者ダンスの全国的かつ国際的なプラットフォーム「エリクシール・フェスティバル」を開催している。ロンドンの「グリーン・キャンドル・ダンス・カンパニー」のように、高齢者の参加型プログラムを長年おこなっているカンパニーがいくつか存在し、さらにはイングリッシュ・ナショナル・バレエ、スコティッシュ・バレエ、ランベールといった世界的なカンパニーが、認知症やパーキンソン病の人々のためのダンス・プログラムを展開している。「ピープル・ダンシング」はニューヨークのブルックリンを拠点とするマーク・モリス・ダンス・グループが開発したモデルにならない、パーキンソン病患者に向けたダンス・プログラムのパートナーシップ・ネットワークを運営している。

— 美術館・ギャラリー

ダリッジ・ピクチャー・ギャラリーは、英国で初めて一般市民に開かれた美術館であり、長年続く同館の高齢者プログラムは、ケイト・ハンブリンがまとめた『これが人生—豊かな時間(This is Living : Good Times)』に詳しく紹介されている。多くの美術館で認知症の人々のためのプログラムが実践されているが、いずれも、ニューヨーク近代美術館(MOMA)の「ミート・ミー・アット・モマ」をモデルとしている。ミドルズブラ近代美術館(MIMA)、スコットランド国立美術館などがその例である。ウィットワース美術館(2016年の英国最優秀美術館)は新進の高齢者アーティストを支援したり、高齢者の芸術参加のための新しい手法を開発するなど、常に革新を続けている。

— 博物館

博物館とは、創造性と好奇心に溢れる場所である。英国ではほとんどの博物館が無料で利用でき、参加型の高齢者プログラムにとって大きな利点となっている。社会的な収蔵品を活用すれば、記憶を喚起する手段として大きな効力を発揮する。リバプール国立美術館による、認知症患者の保健や介護に従事する人々を対象とした研修プログラム「ハウス・オブ・メモリーズ(記憶の家)」がその好例である。多くの同様の取り組みが、大英博物館を拠点とする「高齢者にやさしい博物館ネットワーク(Age Friendly Museums Network)」によって結ばれている。

— 横断的な取り組み

英国各地で地域レベルの活動に取り組む芸術団体の多くは、特定の手法に限定せず、さまざまなジャンルのアートを用いたプログラムを実施している。イングランド南部ワイト島の「インデペンデント・アーツ」がその一つである。「イコール・アーツ」も英国全土で多彩なプログラムを展開している。芸術と健康に関連する芸術団体にも同様のことが言える。例として、イングランド中部地方の「クリエイティブ・ヘルス」や、イングランド中北部ダービーで活動する「アート・コア」が挙げられる。

クリエイティブ・エイジングを掲げたフェスティバルには、スコットランド全域を巻き込んだ「ルミネイト」やウェールズの「グワンウィン(ウェールズ語で「春」を意味する)」など広域のフェスティバルや、イングランド中西部ストーク・オン・トレントの「ライブ・エイジ」のように地域で開催されるものがあるが、いずれも高齢者に関わる芸術活動の多様性と重要性を知らしめるのに有効な手法であると言える。英国外でのフェスティバルとして

は、アイルランドやシンガポール、フィンランドなどでも見受けられる。

デジタル・アートは、芸術の媒体（公演のストリーミング配信や、美術収蔵品のデジタル化などの普及手段）を意味する場合と、創作ツール（デジタルでしか創作できない音声や映像の芸術）を意味する場合がある。これらについては、ジョー・ランダールによる報告書『テクニカル・オールド（Technically Older）』で考察されており、ベアリング財団とノミネット・トラストは共同で、高齢者とデジタル・アートに関する実証事業を支援している。高齢者のメディア・リテラシーを高めるために、芸術は魅力的で、遊び心に満ちた手段になり得るだろう。

— 結びにかえて

英国では高齢者芸術がまさに全盛を迎えている。だがそれは、高齢者に関連する団体や国の政策によってではなく、むしろ芸術団体や芸術助成団体が推進してきた結果である。そうは言っても、時代は転換点に達したように思われる。事実、これほど多くの活動が進行中であり、また高齢化がこれほどまでに顕著な社会問題となった現在、クリエイティブ・エイジングはもはや一時的な流行ではなくなったと感じている。

しかしながら、課題は多い。特に重要なのは、高齢者の組織やサービスがより活発に関わることで、大きなうねりとしていくことであろう。大学等の専門教育機関では、この分野をアーティストのキャリアの重要な一部として認識し、その備えとなる訓練を提供するべきである。

また、介護施設で質の高い芸術活動がおこなわれることは多分に例外的であり、未だ前提とはなっていない。さらに、クリエイティブ・エイジングの重要性が社会により浸透することが重要である。例えばパーキンソン病の人々のためのプログラムにしても、それが自分にとって利益になるのかを患者自身が考えて選択する、あるいは高齢者の家族が介護施設を選ぶ場合にも、施設のアート・プログラムが条件の一つに加わる、というように。

しかし、追い風は吹いている。英国だけでなく他の多くの国々でも高齢者への芸術の重要性が認識されてきている。ブリティッシュ・カウンシルが媒介となることで、私たちはこのエキサイティングな分野で、異なる国の異なる文化から互いに多くを学びあうことができると信じている。

本稿は、「シニア・アート最前線 VOL.1 日本と英国のケーススタディー 課題と展望」（編集・発行：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団）に寄稿した原稿を、デービッド・カトラーが一部改訂したものです。

*1 <https://baringfoundation.org.uk/>

*2 <http://www.ageofcreativity.co.uk/>

*3 <http://www.artshealthandwellbeing.org.uk/appg-inquiry/>

*4 <https://baringfoundation.org.uk/resource/living-national-treasure-arts-and-older-people-in-japan/>

デービッド・カトラー | David Cutler

ベアリング財団 代表

2003年よりベアリング財団の代表を務め、同財団が2010年より推進する高齢者を対象にした芸術活動の支援を統括している。これまでに芸術と高齢者をテーマに多数の著作や報告書を発表している。キャメロン政権では首相によるイニシアチブ「認知症チャレンジ」で芸術分野のワーキング・グループの議長も務めた。現職の前は、地方自治体や非営利団体で社会正義に関する問題に取り組んだほか、アムネスティ・インターナショナル英国支部やブリティッシュ・インスティテュート・オブ・ヒューマン・ライツをはじめ多数の非営利団体の理事、さらには公共団体の非業務執行理事を務めた。